

いわき湯本病院

症 例 概 要 患者：80代 女性

病名：骨盤骨折、褥瘡、経口摂取困難

入院期間：令和3年10月下旬 ～ 令和4年4月下旬

経過：視力障害・聴覚障害あり。自宅の呼び鈴を鳴らしても2日間連続で反応がない為、ケアマネージャーが管理者と警察を動員してカギを開けて自室で動けなくなっている所を発見し前医へ救急搬送。骨盤骨折および褥瘡、嘔気による食思不振により体動困難な状態で当院へ転院となる。コミュニケーションの成立が難しく不信感が強い状態であったが、大き目の書字によるコミュニケーションが可能となり、ご本人が望む整容動作を中心とした関りを継続した所、半年をかけて食思が改善し歩行器での歩行が可能となって施設へ退院する事ができた。

内 容

視覚・聴覚障害みられていたが自宅で一人で生活していた。キーパーソンはいとこで普段はほとんど関わりがなかった。10月中旬14時に健在確認されたが翌日ケアマネージャーが呼び鈴を鳴らしても反応見られず、さらに翌日に管理者と警察を動員して部屋を確認した所体動困難となっているところを発見した。前医へ救急搬送されるが転倒の詳細な状況は不明であり、左恥骨体外側と左腸骨体背面下部に骨折線が見られた。

10月下旬リハビリ目的に当院転院となる。転院時の状況は右下腿、腸骨、背部に褥瘡がみられ、嘔吐により経口摂取が困難な状態であった。また、起居動作に全面的に介助を要するが、接触刺激に対して拒否的でありリハビリの介入も難しい状態であった。

コミュニケーションの確立とご本人が好む事の模索から開始した。開始1ヶ月程度でかなり大きな書字を目のすぐそばに近づけると1字ずつ判別可能である事がわかり、また歯磨きなどの整容動作には拒否が少ない事がわかった。開始3ヶ月程度で嘔吐も落ち着き食事量の向上が見られた。途中血圧の上昇によりリハビリの実施も難しい時期が合ったが、整容動作を中心とした離床機会の拡大に努めた。開始4ヶ月頃には運動に対して積極的になり平行棒内での歩行が可能となった。この頃になると担当職員との間に信頼関係が築け、幼少の頃父の暴力を受けており初期の頃の接触刺激に対しての拒否が強かった一因であることがわかった。開始6ヶ月で起居動作及びシルバーカーでの歩行が誘導により可能となり施設へ退院となった。

嘔吐や高血圧などの症状がみられた際もご本人が好む動作を中心に寄り添う事で、信頼関係を築く

事ができモチベーションを高める事ができたため当初の予想を超え日常生活機能を改善し施設へ退院する事ができた症例である。